

水稻育苗中における苗立枯病防除対策

育苗中に発生する苗立枯病対策としては、播種前や播種時に農薬を育苗箱施用する**予防が基本**です。緑化期より後に使用できる登録農薬が限られているため、種子や育苗資材などの消毒を徹底するとともに、病害の発生しにくい環境づくりや適正な灌水管理を行いましょう。

育苗中に発生する主な苗立枯病

細菌病

種子伝染し、高温、多湿条件で発生しやすい



写真1 もみ枯細菌病

- ① もみ枯細菌病：幼芽が褐変、腐敗、枯死する。新葉がねじれ葉鞘が褐変・腐敗し、芯葉は容易に引き抜ける。
- ② 苗立枯細菌病：展開中の葉身基部が黄白化、萎凋して葉が赤褐色針状に直立し、乾枯する。芯葉は容易に抜けにくい。
- ③ 褐条病：鞘葉に水浸状、淡褐色の不規則で不鮮明な条斑が生じる。

カビ(糸状菌)

発生条件は様々(高温、低温、乾燥、多湿など)

- ① ピシウム菌：カビの発生がほとんど見られない。
- ② フザリウム菌：モミを中心に白色ないし淡紅色のカビが発生する。
- ③ リゾクトニア菌：クモの巣状の白いカビや菌核が発生する。
- ④ リゾープス菌：表面全体に白色～灰色のカビが発生する。
- ⑤ トリコデルマ菌：表面やモミに初めは白色で、後に青緑色に変わるカビが発生する。



写真2 トリコデルマ菌

写真3 フザリウム菌

防除対策

育苗中の薬剤防除として、下記を参考に**予防や早めの防除対策に努めて**ください。

第1表 水稻の育苗中に発生する苗立枯病の主な防除薬剤

(令和7年3月26日現在)

薬剤名	ムレ苗防止	ピシウム菌	フザリウム菌	リゾクトニア菌	リゾープス菌	トリコデルマ菌	苗立枯細菌病	希釈倍数および使用方法	使用時期	使用回数	その他の使用目的	分類
タチガレエース M粉剤	○	○	○					育苗箱1箱当たり6~8gを土壌に均一に混和する	播種前	1回	根の生育促進	4と32
ナエファイン 粉剤	○	○	○		○			育苗箱1箱当たり6~8gを土壌に均一に混和する	播種前	1回	根の生育促進、移植後の活着促進	U17
タチガレエース M液剤	○	○	○					1,000倍液を、育苗箱1箱当たり1ℓ土壌灌注	播種時	1回	移植時の活着促進、根の生育促進	4と32
ナエファイン フロアブル	○	○	○		○			2,000倍液を、育苗箱1箱当たり0.5~1ℓ土壌灌注	播種時	2回以内	根の生育促進、移植後の活着促進	U17
							1,000倍液を、育苗箱1箱当たり0.5ℓ土壌灌注					
カスミン液剤							○	4~8倍液を、育苗箱1箱当たり50mlを播種した種粒の上から均一に散布	覆土前	1回	いもち病(苗いもち)、幼苗腐敗症(イネもみ枯細菌病菌)、褐条病	24
ダコレート 水和剤			○		○	○		400~600倍液を、育苗箱1箱当たり0.5ℓ灌注 ※	播種時~緑化期、但し播種14日後まで	2回以内		1とM05
ナエファイン フロアブル	○	○						1,000~2,000倍液を、育苗箱1箱当たり0.5ℓ土壌灌注	播種時~緑化期	2回以内	根の生育促進、移植後の活着促進	U17
バリダシン 液剤5				○				1,000倍液を、育苗箱で1箱当たり500ml灌注	播種時~発病初期	1回	苗立枯病(白絹病菌)	U18
タチガレエース M液剤	○	○	○					500~1,000倍液を、育苗箱1箱当たり500ml土壌灌注	播種時又は発芽後	1回	移植時の活着促進、根の生育促進	4と32
タチガレン 液剤	○	○	○					500~1,000倍液を、育苗箱1箱当たり500ml土壌灌注又は灌注 ※	播種時又は発芽後	2回以内	移植時の発根及び活着促進、根の生育促進	32

注) 1 育苗箱は30×60×3cmで、使用土壌が約5ℓです。なお、※は上記以外にも処理方法がありますので、適切な処理方法をラベルで確認してください。
 2 タチガレエースMおよびタチガレン液剤には同一有効成分が含まれていますので、総使用回数に注意してください。
 3 分類欄には、FRACコードを記載しました(コードが2つは混合剤)。同一分類(コード)は作用点が同じなので、連用は避けてください。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 News は JA 全農いばらき ホームページでもご覧になれます。